

四月、五月

牛島伸陽

生きる意味って何？　なんて大袈裟すぎるか。じゃあ毎日毎日、生活していくのはどうしてなんだろうって。こんなこと思ったことなかった。でも今思ってるってことは、思わないようにしていただけかもしれない。どうせおれには流れに棹差す勇気なんてないから。ならなんとなくでも、生きるしかない。だいたい生きる意味とか考えなくてもしばらく生活ができた。好きな学校に行く。好きな友達と会う。好きなお酒が飲めるようになる。増えていく。好きな時に映画館に逃げ込む。気の済むまで日は延ばせる。思いのままに夜を伸ばした九畳間。狭くて広い部屋は安全な宇宙。なんとなくで楽しく生きていられる。あくまでファッション辛さ。生きる意味って何？　考えてる時間。無意味とは言わないけれど、だってなんだか合理的じゃない、って思ってた。生きるしかない。おれには生きていくしかない。心も身体も、まだ死にたくないし。もしみんななくなる時はおとなしく一緒にいなくなりたと思うけれど。それだってひとりならまだ死にたくない。一緒に死にたい人と一緒に生きたい。ミヤザキさんと一緒に死ぬるんだった悔いなんて全然無いからきつと本望。だから今は生活する。部屋の中でミヤザキさんを眺める。それだけで溢れてくる生活の匂い。生活が続ける。

こっちの水道水はまずい。そのうちに浄水器を買わないといけない。醤油にも味噌にもまだ口が慣れない。空気が悪いと悪態をつく。毎日眠くないのに早く寝る。毎日眠いのにな早く起きる。日の入らない部屋に座り込んで、一日中画面と向き合っている。たまに逃げ出したくなる。ぐっと堪えている。お昼にカップ麺は毎日食べれば飽きるから、パスタ一五〇グラム茹でる。冷凍うどんを茹でる。それにも飽きたら冷凍の蕎麦を見つける。冷麦二束は一人には多すぎる。夕方五時のチャイムはきっかり一分間。ここは東西線の街。

土曜の朝、すいている電車の窓からスカイツリーが見える。風が強く吹く。ここは海の近い街。新浜通りは海拔〇・五メートル。駅まで歩いて十五分。ひとりで歩けば遠いし、ふたりで歩けばもうちょっと短い。十八時四十分。会社から帰ってくるミヤザキさんを迎えに行く。十九日はケーキ屋さんに寄り道してからゆっくり歩く。二十四時間営業の西友。お惣菜と朝ごはんだけ買って帰る平日。心なしかよそよそしい菓子パン。サイゼリヤでグラッパ飲んで金曜日。家に帰ればミヤザキさんの小さなお弁当箱を洗う。大きな青い水筒を洗う。三日に一回、洗濯物を室内干しにする。ミヤザキさんが会社に着ていくシャツに、覚えてたのアイロンを丁寧にかける。夕飯に餃子を焼いたらフライパンの油を拭き取る。油って、そのまま流したら水道局では赤いランプが点くらしいよ。一度の間違ひは繰り返したくない。主夫になりたい。まだ慣れない。西浜公園。テイクアウトのビリヤニ。週末のショッピングモール。南行徳は光の森。道端にトカゲが消えていく。じきに夏が来る。

ひとり暮らしは、五年目ですね。自己紹介が終わった延長線上でふと口について出たけれど、それは嘘でした。よく考えてみたら、ぜんぜんひとりで暮らしてなかった。少なくともここ一年くらいは、ミヤザキさんのために生きている。自分でも気づかないうちに、どうやらそうみたいだった。こんなにも救われている。ぼくはもうほんとうのひとり暮らしはできません。寝る前に一言でも電話しないとなんだか寂しいなんて、本当に人が変わったみたいだ。知らない自分に戸惑う前に、ミヤザキさんはスイッチが切れたように眠る。卒業式を待って戻ってきたミヤザキさんのみじかい襟足。黒染めしたてのカラー剤の匂い。爆発するとめんどうだから、シャワーは朝に浴びることにして先に寝てしまう。それもそろそろやめて、ちゃんと湯船に浸かるう？ でもそうすると身体はかゆくなるし、でもシャワーで済ませると首も肩も凝ってしまう。汗かく季節をミヤザキさんは嫌う。落ちていく夢。暑がるミヤザキさんは隣でトップスを捲り上げてしまい、ぼくは眠れなくなる。二十三時半。境界線をぐちゃぐちゃにしながら落ちていく。すっかり慣れきってしまった、ふたりでひとつのシングルベッド。寝言が聞こえない。ふた

りがまたひとりとなりになる。枕が移動する。またひとつ生活が消えていく。

初任給が入金された四月の金曜日。綱島の男の子たち。社宅でも部屋の中では当たり前になりひとり。寝付けないから入浴。自律的な自慰行為。修正する。たまにもっと早起きする。本当の満員電車に乗る。名前だけ知っている街が、生活の一部になる。電車に乗っている。貯蓄用の口座なんて開設したから、簡易書留でキャッシュカードが送られてくる。家にいないから、再配達の手し込みをする。ミヤザキさんがすこしでもはやく貯金ができるように、食事代ぐらひは多めに払いたい。でも今のうちにぼくだって貯金しておきたい。だって来年には一緒に住みたい。ちよつといま、つらいかもしれない。でも貯金するしかないから。そのために働く。そのために生きていくしかない。これだってできるんだって、証明するしかない。きっと一年前ならつまらないと言うだろう。でもミヤザキさんと二人で暮らすことができたなら、それがどれだけ素晴らしいことだろうって、毎日考えている。一日の終わりに一緒にいる。一緒に寝る。それが毎日になる。片道五四三円で飛んでいける今の暮らしもべつに不満じゃないけれど。ぼくは帰る家だって同じがいい。貰った合鍵は絶対になくさない。さっさと三百万円、貯金してみせたい。指先で摘んで持ち上げた計画性。近い未来が見えないから。ぼくにはほんの少し先のことさえ想像ができないから。引っ越してきた次の日、ひとりで渡る鶴見川は長かった。四月三日。電話の向こうのミヤザキさんの前で、ぼくは泣いた。木曜日、ひとりで飲むノンアルコールビールはあまりに不味くて笑ってしまった。情けなかった。だから未来を見る前に、まず貯金からはじめる。たとえ面白くなくても、生活は止められない。過去の速度ははやいけど、未来の速度は遅いままだって。ミヤザキさんが言うなら。その遅い未来と一緒に生きたい。小さな未来をツリーに共有する。日曜のお昼、携帯ショップ。そのあと四つ角のイタリアン。ペペロンチーノにしらすがかかけ放題。ぼくの誕生日、ミヤザキさんは平日なのに即興でいちごのケーキをつくってくれた。週末には手紙までくれた。新しいスニーカーで歩く。新品のめがねの匂い。

お気に入りのベーカリー。思わず笑ってしまった。惰性の羅列じゃない。今度は本当に嬉しかったから。

健康な生活をやめない。作業じゃない。出社の日はお弁当をつくる。タツパーに二日分ずつ。狭いキッチンでも、料理は止めない。小さなバスルームで、たまにはお湯を張る。社宅の光熱費は定額。生活は当たり前じゃないから、必死こいてやるしかない。日比谷線の二人掛けの座席にはミヤザキさんとふたりで座りたい。健全な定食屋。黄色い壺漬けを食べて、ミヤザキさんが働いていたファミレスを思い出したい。金曜の夜は日高屋でいつか、にも、土曜日の夜はバーミヤンでいつか、にも、時々なりたい。駅前のパン屋さんにはたまごドーナツ。夕方のマルエツ、割引シールの卵焼き。じいちゃんが昔つくってくれただし巻きを思い出したい。じいちゃんの言うはんぺんは卵焼きだった。お父さんみたいな大きなくしゃみは我慢できるようになりたい。二十歳みたいなリクルートスーツは早く卒業したい。はやくふたりになりたい。ミヤザキさんの胸の中はセーフティ・ゾーン。裸で抱き合う以外の確認方法。ミヤザキさんが部屋着にしている緑のジャージ。ミヤザキだ、と胸のゼッケンを指でなぞると、まだミヤザキだよ、と笑う。原色が似合う。お気に入りだった柔軟剤は販売停止になりそう。たばこの匂いがなんだか苦手になった。でもこうして笑っていたい。米袋をひっくり返してうずくまって泣いているミヤザキさんの背中をけんめいに抱きかかえる台所。ミヤザキさんの目から水が、ぼくのTシャツの左胸までファンデーションを運んでくれる。ミヤザキさんはたまに泣きむしになる。そんな日になるべく一緒にいたい。黒板の裏側も、ベッドの下景色もまだ忘れてない。自分の生活はおざなりにしたくない。逃げずに歯医者行く。コンシーラーなくさない。この暮らしは背後には置いていけない。今日も明日もミヤザキさんの隣にいたい。まだこれが第一幕だと思いたい。きっと同じ層からこの世界を見ているから。波が高い。だからあと三年待つ。海が見たいね、はもう遠くない。方角を合わせる。朝になったらすぐにカーテンを開ける。あじさい。六月になる。雨が来る。